

伝統的手工芸技術の継承過程について：ウイグルの ビシュックを事例に

アナトラ，グリジャナティ
中国新疆師範大学言語学院：講師

<https://doi.org/10.15017/7384460>

出版情報：国際教育文化研究. 13, pp.63-72, 2013-07-26. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



伝統的手工芸技術の継承過程について

—ウイグルのビシュックを事例に—

アナトラ・グリジャナティ

はじめに

現代社会の発展は、人々の物質世界への追求によって実現されたものである。人々の物質への需要は、現代が伝統に代わる一つの過程である。時代の変遷、先進技術、機器設備の応用に伴い、人々の物質への需要もまた不断に変わっている。日常生活のなかで、実用価値のある伝統的な手工芸品も、時代の変遷、工業化の進展の加速に伴って、徐々に「現代化」の商品に取って代わられている。このような代替現象は伝統的手工業の存続に危機をもたらし、手工芸製造の仕事、とりわけ少数民族の手工芸製造の仕事が良好な発展をなしうるか否かが、無視できない問題となっている。

国外の研究分野では、文化人類学の研究の視点から民間の手工芸文化に注目した民族誌研究が比較的多い。例えば、インドネシアの民間楽器「カムラン」の研究を通して、楽器と人との関係を分析し、楽器が人に与える力をどのように理解するかを検討したものや、エチオピア女性の手工芸職人の陶器製造と継承過程を通して、文化継承における女性の役割などの問題を検討したものがある^①。これらの研究は単なる物質文化の研究を超えて、物質と人類との動態関係の分析を通して人類中心主義的世界観（anthropocentric world view）を検討して、我々が新たな研究視点から手工芸技術の継承問題を考察することに理論的根拠を与えている。

中国国内の学者もこの問題を重視し、民族文化の理論、技術手段、継承と保護の模式、発展戦略などの方面から研究をしている。例えば、趙世林『雲南少数民族的文化産業与文化伝承機制研究』（2010年、民族出版社）、盧德生的『民族文化伝承中的社会教育運行機制研究』（2009年、中国社会科学出版社）等がある。前者は、理論面から文化産業と文化事業の関係を理解・認識することの必要性を述べ、「民族文化産業」等の問題を定義して扱い、どのようにして文化産業と民族文化の継承の良好な相互の社会メカニズムを樹立すべきかを検討している。後者は、おもに教育の民族伝統文化の継承における役割を検討している。

このほか、新疆の手工芸文化に注目した研究成果がある。例えば、David Makofsky (2012) はある西洋の人類学者が観察した視点から、新疆カシュガル市の家庭を生産単位とした楽器製造業の現状とその存続空間を研究し、この手工業がウイグル族自身の消費マーケットに依存し

ていることを分析することを主旨として、家庭文化がその民族技芸を支える役割を果たしていることや、手工製造技芸の継承者と消費者の間に存在する組織的な連続性を説明している。ほかに、ビシュック文化に注目した研究もある。例えば、Tursun・Huxur (2003) は歴史文献を通じてビシュックの起源と使用地域を整理しており、Omer・Osman (2009) はビシュックの種類を系統的に研究して、今後の発展方向性を分析している。

しかし、これらの研究成果は描写的研究が主で、深みに欠け、フィールドの個別事例を含んだミクロの実証的研究が少なく、人類学、社会学などの学科の適用が少ない。研究の重点でも、現代化技術が急速に発達しつつある現代社会が、どのような方式を通じて伝統的手工芸術が次の世代に継承されることができて、各民族の当地の文化などを継承・保護しているのかという問題に言及していない。本論では、これらの研究成果の基礎の上に、ビシュックの手工芸の継承様式・継承過程や、製造者が時代の変化に従ってどのように自身の製造技術を向上させて伝統的な製造方法を守っているかといった問題を検討してみたい。

1. トルコ系諸民族のビシュック文化

1.1 「ビシュック」の意味

ビシュックは、ウイグル、カザフ、キルギス、ウズベクなどトルコ系諸民族の間に使われてきた子育て用具である。赤ん坊が男の子であれ女の子であれ、出生の七日後から一年余りの期間使用される。「ビシュック」という語は、『維吾爾語詳解詞典』のなかで、以下の二種の解釈がある。すはわち、1)「嬰兒を寝かせるためにつくったもので、寝床に似た用具」、2)転じて、「ある種の物や現象の発祥地」^②。『漢語辞海』は、「ビシュックは嬰兒を寝かせるための用具で、両側に揺らすことができるもので、しばしば事物の発祥地を比喻する」と解釈している^③。考古資料によると、中央アジアのセミレチエ（七河）地域にある回鶻人の墓からビシュックが発見され、それが現在、学界で認められた最古のビシュックとされ、二千年以上の歴史があることになる。考古学者の研究によると、そのビシュックの形が現在、中央アジアや新疆地域で使われているビシュックとほぼ同じであると言う^④。

ビシュックが歴代のトルコ系諸民族が代々使用し、代々伝えてきた育児用具だったことがわかる。ビシュックの使用地域と使用民族の違いによって、その種類も異なる。ほとんど世界各地でビシュックが使用されたことがあって、ただ形状の違いがあるだけだと表明する研究もある^⑤。例えば、ヨーロッパやアジア北部およびその付近のいくつかの地域では、木か樺皮を使ってお椀型のビシュックにしている。アメリカ、カナダ一帯には側面に三日月形の大枠を彫って、子供が騎馬の姿勢で中に坐っている。中国のある地域では形状がハンモックのようなネット状ビシュックが使われ、イスラム文化圏では上に揺れる木のビシュックが使われたことがある。

トルコ系諸民族がビシュックを使用した歴史は紀元 732 年にまで遡ることができる^⑥。すなわち、紀元 732 年に建てられたキュルテギン碑の銘文にビシュックに関連する内容が記されており、これがビシュック文化に関する最も古い記録とされている^⑦。こうした資料から突厥や回鶻汗国時代からウイグル人の祖先が日常生活のなかでビシュックを使用し始めていたと推

測される。また、マフムード・カシュガリー (Mehmud Kashgeri) の『チュルク語大辞典』のなかにも、“Buxuk”という語が言及されている^⑧。

こうした資料から、カラハン朝の時代にはウイグル人の先人のなかにすでにビシュックを使用する習俗が形成されていたことがうかがえる。その習俗は必然的にビシュックを製造する職人を生み出し、代々の職人の継承・相伝を通して、ビシュックとその製造技術は我々の時代まで伝わってきた。しかしながら、筆者が閲覧した文献にはビシュック製造の職人、製造方法、製造過程などのビシュック製造技術の継承過程を記載したものがない。本論中で紹介するのは、現代ウイグル族のビシュック文化とその継承様式についてである。

1.2 ビシュックの形状と部品

ウイグルのビシュックは木製の長さ約 85-100 センチ、幅約 40-50 センチ、高さ約 60-70 センチほどで半円筒形の形状をしている。釘は一本も使われていない。ビシュックの本体には、赤、黄、緑、青、金色など鮮やかに彩色がほどこされ、鮮やかな色は赤ん坊の目に良いと言われている。ちょうど 1 メートルの丸太を縦割りに真半分にした形状とおもえばよい。その凹んだ中央部に布団を敷きつめ、赤ん坊を仰向けに寝かせる。

ビシュックの脚部は揺らせることができるように弓形になっており、上部には持ち運んだり揺らしたりするのに使う一本の太い取っ手が付いている。またこの取っ手の存在は寝かせたままの赤ん坊を他の場所に移動させることを容易にする。母親が畑など仕事場に伴うときや保育所に連れてゆく時、部屋のなかを移動させる時などこの取っ手が役に立つ。ウイグルのビシュックのこの他の大きな特徴は、底の部分に赤ん坊の排泄物を受けるための器が装着されている点である。赤ん坊の大小便が砂や灰を敷いた受け箱^⑨にたまとそれを引き出して捨てること出来るようになっている。もう一つの特徴としては、ビシュックの中の赤ん坊は二本の布ベルトによって身体ごと縛り付けられた状態に置かれるという点である。

ビシュックには必要となる「Oda (オダ)」、「Xildirxap (シリディシャプ)」、「Zaka (ザカ)」、「Yogek (ヨゲク)」、「Jak (ジャク)」、「Qembirek (チェメビレケ)」、「Xumek (シュメキ)」、「Tizlik (ティズリク)」、「Kol tartku (コル・タルテウク)」、「Put tartku (プッティ・タルテウク)」、「Yapkuq (ヤップクチ)」等の必要とする部品がある。オダとは、ビシュックと底面と同じ大きさの柔らかいムギワラでつくった敷き布団のことを指しており、真ん中あたりに穴を開けてある。この上に同じ大きさの真ん中に穴が開いている敷き布団を敷く。シリディシャプとは、敷き布団が汚れないようにその上に敷くシーツのことであり、その真ん中にも穴を空ける。ザカとは、上下に分かれた柔らかい綿のおくるみである。ヨゲクとは、薄めの掛け布団のことである。ジャクとは、ビシュックの底面の穴に装着する排便受けの容器である。チェメビレケとは、赤ん坊のお尻が痛くならないように、ジャクの周囲に並べておく正方形の小座布団である。シュメキとは、赤ん坊の性器に直接、装着する木製（羊の骨で作る場合もある）の器具であり、小便はこれをとおして受け箱にみちびかれる。男の子と女の子につけるシュメキの形はそれぞれ異なる。ティズリクとは、赤ん坊の両膝におく小座布団である。コル・タルテウクとは、幅 15 センチ程の赤ん坊の両手を固定するべ

ルトである。プッティ・タルテックとは、幅 15 センチ程の両足を固定するベルトである。ヤップクチとは、赤ん坊がビシュックのなかで寝ている間これを覆う綺麗なレースやシルクの天蓋であり、お母親が赤ん坊に授乳するときに重宝される。ヤップクチは赤ん坊を蚊や虫から守り、寒い時期には保温の役割も果たす。またヤップクチは、単に虫除けや保温用としてだけではなく、時と場合により赤ん坊（へ）の視線をさえぎる役割も果たしている。例えば、赤ん坊が寝ているとき夫婦の性的交渉を見せないようにこれで覆う。その後で体を洗淨せず（清めず）に赤ん坊と顔をあわせることは宗教的タブーだからである。また、かつては特に子どもを産めなかった女性がお見舞いに来たとき、ヤップクチをかぶせて彼女が直接赤ん坊を見ないようにする役割もあった。これらの部品は、もちろんビシュックを製造する人がつくるものではないが、これらのうち一つの部品でも欠けると赤ん坊をビシュックに入れることはできない。

1.3 ビシュックの道具としての役割

ビシュックは新疆ウイグル社会において非常に大きな役割を果たしてきた。例えば、農業中心の地域では、畑に出かける母親は赤ん坊を携帯しやすいビシュックに寝かせたまま畑に連れて行き、農作業に従事してきた。このように、ビシュックは屋内外において赤ん坊を寝かせておく入れ物としての役割をもち、赤ん坊自身やその世話に当たる者に対して他の機能も派生してくる。すなわち、ビシュックは赤ん坊にとって安全と眠りを確保する場であり、世話をする者（主に母親）にとっては育児期間中、自らの自由や休息あるいは仕事に振り向ける時間を確保するための用具でもある。また揺ることができる機能がある場合、赤ん坊の睡眠を誘導し興奮を沈静させる役割も果たす。

その他、ビシュックの中に横たわった赤ん坊のお尻の真下の部分には、布団をとおしてゆりかごの底まで5センチほどの穴が開いており、排便受けはその真下にくるようにセットされている。赤ん坊はゆりかごの中に固定されているので、その排便はほかに漏れることなく直接、受け箱に収まる。こうした機能は赤ん坊の排泄物の処理を簡便化し母親の育児の負担を軽減させるのと同時に、衛生的・経済的でもある。さらに、赤ん坊の両手と両足を真直ぐにし、ベルトで固定しているため赤ん坊がO脚など後天的身体障害になりにくい。難産などで頭の形が整っていない赤ん坊に帽子をかぶせてビシュックで寝かせることによって、頭の形が次第に丸くなってくる。手足が固定された赤ん坊はぐっすり眠り、健康的に成長していく。

2. ビシュックの生産と継承様式

2.1 ビシュックの生産

カシュガル民族工芸品は長い歴史をもち、種類も多く、独特の民族的様式を具えており、中国内外の学者から「小民間芸術センター」と言われている。ビシュック文化はカシュガルの手工芸文化のなかで重要な位置を占めており、ビシュックの製造および生産は広大な新疆の各地に存在している。そのなかでもカシュガルは昔からのウイグル人の集住地域でありその伝統的なビシュックの供給地となっている。ウルムチのような都市部でもビシュックといえバカシュガル製のものに人気があり、多くの人はカシュガルからわざわざビシュックを取り寄せてい

る。またカシュガルのビシュックは地域のあるいは民族の伝統工芸としても位置づけられており、その製造や技能の継承および生産はきわめて限られた職人たちによって担われている。

カシュガル市内近郊のXamalbak（シャマルバク）郷にBuxukqi Mahale（ビュシュックチ・マハラ）という村があり（最近「二村四隊」と改称されたが、現地の人は元の村名で呼び慣れている）、その名は「ビシュックを製造する人」という意味である。すなわち、この村は「ビシュックを製造する職人」と名付けられているのである。現地の人々の話しによると、一昔この村の人々のほとんどがビシュックを製造することで生活を送っていたという。1970年代から村を離れ他の地域へ出て行く人や職業を変える人が増え、ビシュックを製造する職人は少なくなり、2008年には二人の兄弟がその中心的役割を担っていた^⑨。現在、この村にはビシュックの製造を続けている職人は一人しかいない。その職人は、ウイグル伝統工芸の著名な職人として新疆の民間工芸を紹介した書籍『図説新疆民間工芸』（新疆人民出版社2006）に登場し、また、小中学校の国語教材である『ウイグル語文』という教科書のなかにも採録され、ウイグル民間手工芸術の模範として紹介されているTewekkur・Kadir（タワクリ・カディル）氏である。氏の祖先は200年も前からイリやカザフスタンなどの地域においてビシュックを製造する名人として知られており、タワクリ・カディルはその5代目に当たるのである。彼が作ったビシュックは、ホータン、ウルムチ、イリなどの地域においても人気があり、わざわざ遠くから彼のビシュックを買いに來たりするという。

ビシュックを製造する木材は、ふつう楊か柳の木から取り、すべての製造過程において一本の釘も使用しない。タワクリ・カディルの場合、ビシュックに使う木材に拘りがあり、桑の木の使用は避けている。作業場は、ポプラからビシュックのさまざまな部位を削り出す作業場とそれらを組み立てたり、色付けをするための作業場の二ヶ所で行われている。前者は作業場のほかに材料となる木を置いたり乾燥させたりするために広い敷地を有しているが、後者は自宅兼作業場および自宅続きの倉庫からなる大きな住宅程度の敷地である。ここでのビシュック製造の形態は家内工業的であり、調査当日は木工作业場のほうにはタワクリ・カディル氏と雇われた従業員が作業にあたっていた。

昔は、木材を切りとる作業をはじめ、ビシュックの各部分の形をつくる作業まですべてが人力で行っていた。そのため、一つのビシュックが出来上がるまでは数日間もかかっていた。現在、ビシュックを組み立てる木材はすべて機械で加工されており、人力で行なう作業はすべてが機械に取って代わった。ビシュックの各部分はそのサイズに合わせて切りとり、形づくりも機械で行なっている。つくる人と材料がそろえばひとつ1時間ほどでつくれる。最初から一人で組み立てるなら一日3個はつくれるという。ビシュックの本体が出来上がったら色付けの作業があり、最初はペンキを塗る。それが乾いたあと透明のワニスを塗り、ビシュックを完成させる。

2.2 継承様式

人類社会のあらゆるものごとの発展において、まず現れるのはものごとの使命を担う人であり、彼らは具体的な伝授行為でもって知識や技術を後進に受け継いでもらい、後進をして先人

もしくはある流派の学説や伝統を学ばせ、さらに人類社会の維持と発展を促している^⑩。手工業においては、その継承様式はおもに二種ある。一つは家庭式の「父子相伝」であり、技術は家庭の成員のなかだけで伝えられる。もう一つは「師徒相授」であり、親方が徒弟を引き受けて、仕事のなかで技芸を伝授するものである。この両種の形態は同時に存在し、その存在は手工業の維持や継承に大きな役割を果たしている。

伝統的な手工業はウイグル族の民族産業において重要な位置を占めており、よって、彼らの家庭教育のなかでは民族の手工芸を習得する重要性が非常に強調されている。ウイグル社会では昔から「男の子にとっては、72種の手工芸を習得してもまだ少ない」といったことわざまで広まっており、男の子に小さいうちから何か一つ技術を身に付けさせる。いくつかのウイグル古典詩人の作品や手工芸冊子のなかにも、ウイグル工芸に関する特殊な知識が記されている。不完全な統計によると、ウイグル族には現在、260種類以上の手工芸があると言われている^⑪。それぞれの手工芸品は、伝統的な工房と製造工芸を維持するという基礎のうえに、時代の変化や消費者の需要に応じて更新・改良されている。経済が急速に発展している現代社会においても、家庭がウイグル族の手工業の継承・発展の中心になっている。ウイグル族の多くは大家族であり、家長父制を行っているため（父親が家庭のなかで多く決定権をもつ）、ウイグル族の伝統的な製造工芸の継承はおもに家庭であり個別ではないと言える。すなわち、「父子相伝」を主として手工技芸を伝達しているのである。

ビシュックの製造および生産は新疆の各地に存在しているが、そのなかでカシュガルは昔からのウイグル人の集住地域であり、その伝統的なビシュックの供給地となっている。ウルムチのような都市部でもビシュックといえばカシュガル製のものに人気があり、多くの人はカシュガルからわざわざビシュックを取り寄せている。またカシュガルのビシュックは地域のあるいは民族の伝統工芸としても位置づけられており、その製造や技能伝承および生産はきわめて限られた職人たちによって担われている。すなわち、現在新疆でビシュックの製造と言えば、前述したタワクリ・カディル氏がその中心的な人物となっている。彼は現在50歳、この仕事に従事して30年あまり、新疆では有名なビシュック製造の職人である。タワクリ・カディルの一家は6人、子ども4人、そのうち次男が家業を受け継ぐとしている。次男は、幼いころからビシュックに興味をもち、父親の作業を手伝ってきた。小学校時代から父親に付いてその技術を学び、夏休みや冬休みの間、ビシュックの色付けをしていた。

筆者がタワクリ・カディル氏を訪問したときには、彼には5人の徒弟がいた。徒弟それぞれが自身の能力に基づいてビシュックの各部位をつくり、各部位ができた後でタワクリ・カディル氏がビシュックを組み立て、最後に彼の次男が色塗りをしていた。彼は30年余りのビシュック製造生涯において、伝統的なビシュックの製造を維持すると同時に、使用者の要求を満たすため、その研究も続け、デザインや色付けを含めてビシュック製造業に新たな発展をもたらした。さらに、現代人の必要に適した電動ビシュックを開発し、使用者により多くの選択肢を与えている。このほか、カシュガル観光業の発展と中国内外の旅行客の需要に応じて、おもちゃとしてのミニ・ビシュックを開発し、家族の収入を増し、さらには旅行客を通してウイグル族独特の民族文化を世界各地に広めてさえいる。

タワクリ・カディル氏は30年以上にわたるビシュック製造の生涯において、多くの徒弟をもったが、そのなかで独立してビシュック製造業に従事したものは少ない。とりわけ最近の数年は、ビシュックの需要量の減少にともない、この学芸を学ぶ人も減ってきている。以前は、新疆各地のウイグル族、カザフ族、キルギス族、ウズベク族などトルコ系諸民族の家庭では、男の子であれ女の子であれ、赤ん坊のへその緒が治った頃（7日目から9日目）からビシュックを使用していた。しかし、社会の発展と計画出産政策の少数民族地域における普及にともない、とくにウルムチなどの大都市では子どもをビシュックで寝かすことを好まない人が増えてきた。その理由として、(1)ビシュックで赤ん坊の両手足をきつく縛ることは血液の良好な流れを阻害する。(2)縛られたままの状態が必要以上に従順な性格の形成をうながし主体性のない人間にしてしまう。(3)ビシュックを横方向に揺らすのは赤ん坊の脳の発達に良くない（縦方向に揺れるのであれば、赤ん坊が子宮にいるときと同じ揺れであり脳に悪影響はないという意）。(4)シュメックを使うことで寝ている赤ん坊がいつも清潔で衛生的に保たれると言われるが、逆にトイレトレーニングが遅くなるなどが挙げられている^⑩。よって、ビシュックへの需要は以前に比べて減少しており、この仕事に従事する民間の製造職人が次々と転職するようになった。

現在、タワクリ・カディル氏のもとにいる徒弟のうち、ビシュック製造技術を受けつぐあるいは、将来独立してビシュックをつくる職人になると思っているものはいなかった。氏は、小さい頃から作業を手伝い、色付けだけでなくすでにビシュックの組み立てまで一通りの作業をこなすことができる次男に五代続けてきた技術を受けつぐと信じている。現在20代の次男も父親からその技術を引き受け、継承していく意思を行動に出している。このように、ビシュック製造業の「師徒相授」という継承様式は徐々にその機能を失いつつあり、同様な傾向はその他の手芸工業にも表れている^⑪。

おわりに

都市化が急速に進んでいる今日、都会から田舎の隅々までに都市化の影響を受けている。人類社会は巨大な物質的な富と物質的エネルギーをもったが、かえってその先導的役割をする文化力と精神的な智慧をおろそかにしてしまった^⑫。伝統的な手工製造業にとって、稼いだ利潤が手工職人の満足させることができるかどうか——この問題もまた現代化された機械が生まれた時代が直面する挑戦だといえよう。カシュガルでは、手工業はおもにウイグル族の市場に依存して存続している。この市場の需要がウイグル族の家庭の手工技芸の継承に対する重要な役割を促している。家庭内継承を通じて、ウイグル族の伝統文化は代々習得され発展されることができる。ウイグル族の伝統的な手工業の発展の調査を通して容易にわかるのは、この民族の伝統文化が家庭を基本単位として代々受け継がれ、彼らはこのプロセスを通じて自身の民族の手工芸文化の特質やビシュック文化に関わる育児文化を保存し、そのことによって、ビシュック製造業の発展と継承を支えていることである。都市化の建設とグローバル化の進展の速度が

日増しに加速する現代社会では、民族の文化力と国家の文化力をどのようにうまく保護・発展させるかが現代の直面する重要な問題である。ウイグル族の文化の発展過程のなかに、あるいはその答えを見出せるかもしれない。それは、つまり、家庭の伝統文化に対する教育を強化することであって、自身の民族文化の精髓を深く理解することは、各民族の伝統的な手工製造工芸と他民族文化を継承、保護、宣揚する重要なプロセスなのであろう。

〔付記〕本稿は、住友財団2011年度「アジア諸国における日本関連研究助成」の支援を受け行われた研究成果の一部である。

-
- ① 床呂郁哉，河合香吏編 2011『物の人類学』，京都大学学術出版会参照。
 - ② 『維吾爾語詳解詞典』（1），民族出版社，1991年参照。
 - ③ 『辞海』三卷本（1），上海辞書出版社，1979年，1623頁参照。
 - ④ 熱娜古・卡德爾『維吾爾族搖床問話研究』，新疆大学碩士研究生論文，2011年，7頁参照。
 - ⑤ 同上、7-8頁。
 - ⑥ 同上、9頁。
 - ⑦ 同上、9頁。
 - ⑧ 『突厥語大辞典』に、「baxik urgudi, anar bashik ugritti. Ura ut baxik urgidi」という記述があり、そのなかの「baxik」は「ビシュック」のことを指しており、「urgudi」は「揺らす、揺れる」を意味する。「Ura ut」は「母乳をやっている女」という意味を表す。
 - ⑨ 地域性が見られる。カシュガルでは、「Jak」あるいは「Kultuk」と言われる陶器で作られた小さめの鉢の形の物を使われる。陶器の「Jak」あるいは「Kultuk」は臭いが付きにくいという特徴で広く使われている。
 - ⑩ 筆者の2012年7月におこなった現地調査による。
 - ⑪ 姜霞 2004「中国伝統美術継承方式之我見——析“師徒相授”与“父子相伝”的教育模式」『美与時代』2004年第9期，24-26頁。
 - ⑫ 阿迪力・穆罕默德 2008『麦盖提历史文化』，新疆大学出版社，153頁。
 - ⑬ 坂元一光，アナトラ・グリジャナティ 2007「ビシュック育児とその再編——中国新疆ウイグル自治区の育児文化の一側面——」九州大学大学院教育学研究紀要，第10号，69-70頁。
 - ⑭ 例えば、David Makofsky，趙楠 2012「現代人類学視下的ウイグル伝統手工芸文化研究」『前沿』，2012年第11期，160-162頁参照。
 - ⑮ 高占祥 2007『文化力』北京大学出版社，1頁。

<参考文献>

日本語文献

- 坂元一光 2001「中国新疆ウイグルの産育儀礼とその変容—处理的知識を中心に—」九州大学大学院教育学研究紀要, 第3号, 177—190頁
- 坂元一光, アナトラ・グリジャナティ 2007「ビシュック育児とその再編—中国新疆ウイグル自治区の育児文化の一側面—」九州大学大学院教育学研究紀要, 第10号, 69-70頁
- 床呂郁哉, 河合香吏編 2011『物の人類学』, 京都大学学術出版会参照
- 谷 泰 1986「揺籃の民族誌」小林登他編『新しい子ども学3—子どもとは—』海鳴社

中国語文献

- 阿迪力・穆罕默德 2008『麦盖提历史文化』, 新疆大学出版社, 第153頁
- David Makofsky, 趙楠 2012「現代人類学視下のウイグル伝統手工芸文化研究」『前沿』, 2012年第11期, 160-162頁
- 高占祥 2007『文化力』北京大学出版社
- 姜霞 2004「中国伝統美術継承方式之我見——析“師徒相授”与“父子相伝”的教育模式」『美与時代』2004年第9期, 24-26頁
- 盧德生的 2009『民族文化伝承中的社会教育運行機制研究』, 中国社会科学出版社
- 樓望皓 1996『新疆民俗』新疆人民出版社
- 韓連贊, 程万里 2001『新疆民俗風情録—民俗』新疆人民出版社
- 吳鳳岡 主編 1993『中国民俗育児研究』中国大百科全書出版会
- 趙世林 2010『雲南少数民族的文化産業与文化伝承機制研究』, 民族出版社

ウイグル語文献

- Abdukerim・Rahman, Reweydulla・Hemdulla, Xerip・Huxtar
1996『Uyghur Orup - Adetliri (ウイグル族の習俗)』新疆青少年出版社
- Gulnar・Kadir 2011「Uyghurlarning Bushuk Medeniyite Hakkide」
(ウイグル族のビシュック文化研究) 新疆大学修士論文
- Tursun・Huxur 2003「Bushuk Togrisida」
(ビシュックについて) 新疆師範大学学報, 第1期
- Omer・Osman 2009「Uighurlarda Bushuk Medeniyiti」
(ウイグル人のビシュック文化)新疆社会科学, 第3期

**Succession processes of traditional handicrafts :
in the example of Uighur's *Bushuk***

Guljennet ANAYTULLA

This paper is a report of the research conducted into succession processes of traditional handicrafts. In present-day Chinese society, marked by rapid globalization and urbanization, it has become increasingly difficult to preserve traditional culture amid the abrupt changes in industrial structure and life-styles. While it is possible to record certain handicrafts on film or in words, it is not easy to reliably pass skills from one person to another and ensure their preservation. This paper focuses on *bushuk*, which is deeply embedded in nursing culture and rites of Xinjiang Uighur Autonomous Region of China, and sets to explore the routes of succession of its manufacturing technology and how that has been passed down into the present. It is all too evident by the research in the development of handicrafts of the Uighurs, that their traditional culture is being handed down through successive generations of separate households, and that they have preserved in that process the characteristics of their ethnic handicrafts culture and the nursing culture related to the use of *bushuk*, and in doing so, have sustained the development and succession of its manufacturing technology. Present-day society, with its daily acceleration rates of urban construction and globalization, faces the modern problem of how to preserve and develop the energies of ethnic and national cultures. It could be possible to find the answer in the process of development of Uighur culture. And that is, in a word, a reinforced education on traditional culture in the household, as the profound understanding of the essence of one's own ethnic culture constitutes an important process in the succession, preservation and enhancement of all ethnic traditional handicrafts and other ethnic cultures.